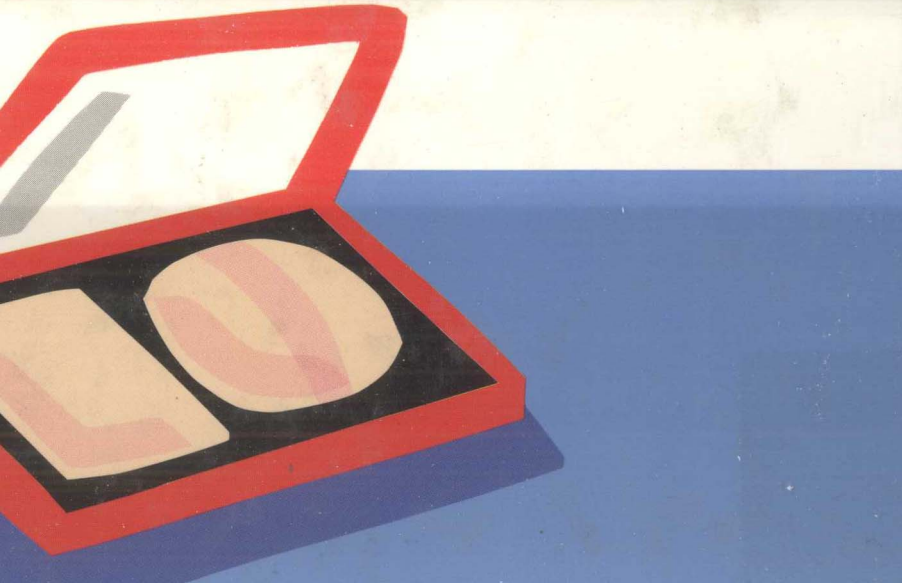
或る女

後編

有島武郎



或る女

後編

ほるぷ出版

市古貞次・小田切進＝編　日本の文学39

或る女（後編）

著　者　有島武郎

責任編集　市古貞次（古典編）
　　小田切進（近代編）

発行日　昭和五十九年八月一日　初版第一刷発行

発行所　株式会社　ほるぷ出版
　　代表　中森蒔人
　　東京都新宿区新宿二―十九―十三
　　電話（〇三）三五四―七〇三一（代）

総発売元　株式会社　ほるぷ
　　東京都新宿区新宿二―十九―十三
　　電話（〇三）三五六―六二一一（代）

製　作　東京連合印刷株式会社

印刷　大日本法令印刷株式会社

目次

或る女（後編）　1
注　549
『或る女』における女性のタクト（戦術）——〈明治近代〉への抵抗と挫折——　後藤明生　555
写真一葉　（不明）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

二十二

何処かゝら菊の香がかすかに通って来たように思って葉子は快い眠りから眼を覚ました。自分の側には、倉地が頭からすっぽりと蒲団を被って、鼾も立てずに熟睡していた。料理屋を兼ねた旅館のに似合わしい華手な縮緬の夜具の上にはもう大分高くなったらしい秋の日の光が障子越しに射していた。葉子は往復一ヶ月の余を船に乗り続けていたので、船脚の揺めきの名残りが残っていて、体がふらり〳〵と揺れるような感じを失ってはいなかったが、広い畳の間に大きな軟い夜具をのべて、五体を思うまゝ延ばして、一晩ゆっくりと眠り通した

その心地よさは格別だった。仰向けになって、寒からぬ程度に暖まった空気の中に両手を二の腕までむき出しにして、軟かい髪の毛に快い触覚を感じながら、何を思うともなく天井の木目を見やっているのも、珍らしい事のように快かった。

稍小半時もそうしたまゝでいると、帳場でぼん／＼時計が九時を打った。三階にいるのだけれどもその音はほがらかに乾いた空気を伝って葉子の部屋まで響いて来た。と、倉地がいきなり夜具をはね除けて床の上に上体を立てゝ眼をこすった。

「九時だな今打ったのは」

と陸で聞くとおかしい程大きな塩がれ声で云った。どれ程熟睡していても、時間には鋭敏な船員らしい倉地の様子が何んの事はなく葉子を微笑ました。

倉地が立つと、葉子も床を出た。而してその辺を片付けたり、煙草を吸った

りしている間に（葉子は船の中で煙草を吸う事を覚えてしまったのだった）倉地は手早く顔を洗って部屋に帰って来た。而して制服に着かえ始めた。葉子はいそ〳〵とそれを手伝った。倉地特有な西洋風に甘ったるいような一種の匂いがその体にも服にもまつわっていた。それが不思議に何時でも葉子の心をときめかした。

「もう飯を喰っとる暇はない。又暫らくは忙しいで木っ葉微塵だ。今夜は晩いかも知れんよ。俺れ達には天長節も何もあったもんじゃない」

そう云われて見ると葉子は今日が天長節なのを思い出した。葉子の心はなお〳〵寛濶になった。

倉地が部屋を出ると葉子は縁側に出て手欄から下を覗いて見た。両側に桜並木のずっとならんだ紅葉坂は急勾配をなして海岸の方に傾いている、そこを倉地の紺羅紗の姿が勢よく歩いて行くのが見えた。半分がた散り尽した桜の葉は

真紅に紅葉して、軒並みに掲げられた日章旗が、風のない空気の中に鮮やかに列んでいた。その間に英国の国旗が一本交って眺められるのも開港場らしい風情を添えていた。

遠く海の方を見ると税関の桟橋に繋われた四艘程の汽船の中に、葉子が乗って帰った絵島丸もまじっていた。真青に澄み亙った海に対して今日の祭日を祝賀する為めに檣から檣にかけわたされた小旌が翫具のように眺められた。

葉子は長い航海の始終を一場の夢のように思いやった。その長旅の間に、自分の一身に起った大きな変化も自分の事のようではなかった。葉子は何がなしに希望に燃えた活々した心で手欄を離れた。部屋には小さっぱりと身仕度をした女中が来て寝床を挙げていた。一間半の大床の間に飾られた大花活けには、菊の花が一抱え分も活けられていて、空気が動く度毎に仙人じみた香を漂わした。その香を嗅ぐと、ともするとまだ外国にいるのではないかと思われるよう

な旅心が一気にくだけて、自分はもう確かに日本の土の上にいるのだと云う事がしっかり思わされた。

「いゝお日和ね。今夜あたりは忙しんでしょう」

と葉子は朝飯の膳に向いながら女中に云って見た。

「はい今夜は御宴会が二つばかり御座いましてね。でも浜の方でも外務省の夜会に入来らっしゃる方も御座いますから、たんと込み合いは致しますまいけれども」

そう応えながら女中は、昨晩遅く着いて来た、一寸似体の知れないこの美しい婦人の素性を探ろうとするように注意深い眼をやった。葉子は葉子で「浜」と云う言葉などから、横浜と云う土地を形にして見るような気持ちがした。

短くなってはいても、何んにもする事なしに一日を暮らすかと思えば、その秋の一日の長さが葉子にはひどく気になり出した。明後日東京に帰るまでの間

に、買物でも見て歩きたいのだけれども、土産物は木村が例の銀行切手を崩してあり余る程買って持たしてよこしたし、手許には哀れな程より金は残っていなかった。一寸でもじっとしていられない葉子は、日本で着ようとは思わなかったので、西洋向きに註文した華手過ぎるような綿入れに手を通しながら、とつ追いつ考えた。

「そうだ古藤に電話でもかけて見てやろう」

葉子はこれはいゝ思案だと思った。東京の方で親類達がどんな心持ちで自分を迎えようとしているか、古藤のような男に今度の事が如何響いているだろうか、これは単に慰みばかりではない、知っておかなければならない大事な事だった。そう葉子は思った。而して女中を呼んで東京に電話を繋ぐように頼んだ。

祭日であった故か電話は思いの外早く繋がった。葉子は少し悪戯らしい微笑を笑窪の入るその美しい顔に軽く浮べながら、階段を足早やに降りて行った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

今頃になって漸く床を離れたらしい男女の客がしどけない風をして廊下の此所彼所で葉子とすれ違った。葉子はそれらの人々には眼もくれずに帳場に行って電話室に飛び込むとぴっしりと戸をしめてしまった。而して受話器を手に取るが早いか、電話に口を寄せて、

「あなた義一さん？　あゝそう。義一さんそれは滑稽なのよ」

とひとりでにすら〳〵と云ってしまって我れながら葉子ははっと思った。その時の浮々した軽い心持ちから云うと、葉子にはそう云うより以上に自然な言葉はなかったのだけれども、それでは余りに自分というものを明白にさらけ出していたのに気が付いたのだ。古藤は案の条答え渋っているらしかった。頓には返事もしないで、ちゃんと聞えているらしいのに、唯「何んです？」と聞き返して来た。葉子はすぐ東京の様子を飲み込んだように思った。

「そんな事如何でもよござんすわ。あなたお丈夫でしたの」

と云って見ると「えゝ」とだけすげない返事が、機械を通してゞあるだけに殊更らすげなく響いて来た。而して今度は古藤の方から、

「木村……木村君はどうしています。あなた会ったんですか」

とはっきり聞えて来た。葉子はすかさず、

「はあ会いましてよ。相変らず丈夫でいます。難有う。けれども本当に可哀相でしたの。義一さん……聞えますか。明後日私東京に帰りますわ。もう叔母の所には行けませんからね、あすこには行きたくありませんから……あのね、透矢町のね、雙鶴館……つがいの鶴……そう、お分りになって？……雙鶴館に行きますから、あなた来て下される？……でも是非聞いていたゞかなければならない事があるんですから……よくって？……そう是非どうぞ。明日後日の朝？難有うきっとお待ち申していますから是非ですのよ」

葉子がそう云っている間、古藤の言葉は仕舞まで奥歯に物のはさまったように

重かった。而して動ともすると葉子との会見を拒もうとする様子が見えた。若し葉子の銀のように澄んだ涼しい声が、古藤を選んで哀訴するらしく響かなかったら、古藤は葉子の云う事を聞いてはいなかったかも知れないと思われる程だった。

朝から何事も忘れたように快かった葉子の気持ちはこの電話一つの為めに妙にこじれてしまった。東京に帰れば今度こそは中々容易ならざる反抗が待ちうけているとは十二分に覚悟して、その備えをしておいた積りではいたけれども、古藤の口うらから考えて見ると面とぶつかった実際は空想していたよりも重大であるのを思わずにはいられなかった。葉子は電話室を出ると今朝始めて顔を合わした内儀に帳場格子の中から挨拶されて、部屋にも伺いに来ないで忸々しく言葉をかけるその仕打ちにまで不快を感じながら、匆々三階に引上げた。

それからはもう本当に何んにもする事がなかった。唯倉地の帰って来るのば

かりがいら〳〵する程待ちに待たれた。品川台場沖あたりで打出す祝砲が幽かに腹にこたえるように響いて、子供等は往来でその頃頻りにはやった南京花火をぱち〳〵と鳴らしていた。天気がいゝので女中達ははしゃぎ切った冗談などを云い〳〵あらゆる部屋を明け放して、仰山らしくはたきや箒の音を立てた。而して唯一人この旅館では居残っているらしい葉子の部屋を掃除せずに、いきなり縁側に雑巾をかけたりした。それが出て行けがしの仕打ちのように葉子には思えば思われた。

「何所か掃除の済んだ部屋があるんでしょう。暫らくそこを貸して下さいな。而してこゝも奇麗にして頂戴。部屋の掃除もしないで雑巾がけなぞしたって何んにもなりはしないわ」

と少し剣を持たせて云ってやると、今朝来たのとは違う、横浜生れらしい、悪ずれのした中年の女中は、始めて縁側から立上って小面倒そうに葉子を畳廊下

一つを隔てた隣りの部屋に案内した。

今朝まで客がいたらしく、掃除は済んでいたけれども、火鉢だの、炭取りだの、古い新聞だのが、部屋の隅にはまだ置いたまゝになっていた。開け放した障子から乾いた暖かい光線が畳の表三分ほどまで射しこんでいる、そこに膝を横崩しに座りながら、葉子は眼を細めて眩しい光線を避けつゝ、自分の部屋を片付けている女中の気配に用心の気を配った。どんな所にいても大事な金目なものをくだらないものと一緒に放り出しておくのが葉子の癖だった。葉子はそこにいかにも伊達で寛濶な心を見せているようだったが、同時に下らない女中づれが出来心でも起しはしないかと思うと、細心に監視するのも忘れはしなかった。こうして隣りの部屋に気を配っていながらも、葉子は部屋の隅に規帳面に折りたゝんである新聞を見ると、日本に帰ってからまだ新聞と云うものに眼を通さなかったのを思い出して、手に取り上げて見た。テレビン油のような香

がぷん〳〵するのでそれが今日の新聞である事がすぐ察せられた。果して第一面には「聖寿万歳」と肉太に書かれた見出しの下に貴顕の肖像が掲げられてあった。葉子は一ヶ月の余も遠退いていた新聞紙を物珍らしいものに思ってざっと眼をとおし始めた。

一面にはその年の六月に伊藤内閣と交迭して出来た桂内閣に対して色々な註文を提出した論文が掲げられて、海外通信には支那領土内に於ける日露の経済的関係を説いたチリコフ伯の演説の梗概などが見えていた。二面には富口という文学博士が「最近日本に於ける所謂婦人の覚醒」と云う続き物の論文を載せていた。福田と云う女の社会主義者の事や、歌人として知られた与謝野晶子女史の事などの名が現われているのを葉子は注意した。然し今の葉子にはそれが不思議に自分とはかけ離れた事のように見えた。

三面に来ると四号活字で書かれた木部孤節と云う字が眼に着いたので思わず

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.